

私は愛などでなく、名声を求めない名人であることを神に認められた

Greatchain

September 4, 2024

まず私を応援し、心から賛同してくださるユーチューブの皆さん方に、感謝申し上げます。今この瞬間にも私を妨害し、混乱させようとしている者たちがいる。私はそういう者たちを無視している。無視すればあえた近づくことはない。また先日騒がれた、私の母（生きていれば115歳）と私の、穏やかでなかった関係については、大方の指摘してくださる通りである。しかし私はこれによって成長することができた。そのことを別にしても、私は母を尊敬し愛している。それを今からここで説明しようと思う。

まずこの表題の説明をしよう。「愛などでなく…」というのは、私が「愛」を軽視しているという意味ではない。ただ神が、私を愛のお手本か何かのように称揚してくださった、と考えるのは、私にとっても神にとっても間違いだということである。もしそうなら、私は「やめてください、そんなコソバユイことを言わないでください」と、顔を赤くして言うだろう。これはほとんど誰でも同じでないだろうか？ いったい私は何を神に認められたのだらうと、冷静に推測してみると、自分は何を言われたら一番うれしいか、ということに行き着く。それは私が「名声を求めない名人」であることを、認められたときだった。「名人」とは思い上がりではないかという人がいるだろう。しかし私の心の底にあるのは、常にこの「思い上がり」であったことを告白する。神は私の心の底を知っておられるはずだから、私と神はと同じ考えのはずである。

他人がどう考えようと、これが私にとって偽りのない真実である。これは完全に「私事」であって、恥ずかしいことではあるが、私は「名人^{かたぎ}気質」の家系に生まれたと思っている。そしてこの感慨は、若者のものでなく、90歳を超えた現在の私のものと自覚している。そしてこの名人気質は私の中で道徳につながっている。

私の「本物志向」は、私がやや贅沢かなと思っている自宅の「床の間」にある。これを作った大工さんは、当たり前のようにこの名作を作り、何ひとつ自慢することもなく、どこかへ去ったまま帰ってこない。これは日本文化の誇りではないだろうか？

そしてそこに、私の母による般若心経の書写の掛け軸が掛かっている。これは、これを見る人々が一様に認めるように、70を超えた老人にしては恐ろしいほどの、書の技術と気迫が籠っている。これは私にとって値のつけられない、しかしほとんどの人が知らない、そこに一瞬生じた気迫の時間を、切り裂くような作品である。確かその所に母の署名はあるが、母はこれによって名を知られようとは、片時も思わなかった。

さらにもう一つ、私の父方の祖父の作った、見事な書類戸棚がある。これは明治維新で失職した士族の祖父が、当時の監獄の看守として働いていたときに、担当の囚人から手ほどきを受け、指物師の名人としての腕を見せた作品である。これは黒ずんではいるが、いまだに私の娘の家に、その精巧な作りが奇跡のように残っている。私はこの囚人と祖父が一心同体となって、夢のように共に過ごした至福の時間を、想像することができる。

私は神から、何らかの、普通は宗教的とは言わない資質を認められたものと解釈している。読者の方々は不審に思われるかもしれない。しかしご存知のように、私に次々と驚くべきことが起こって、とうとうこれを自分の宿命（使命）として認めざるを得なくなった。私はそれが起こっている間中、自分でも驚くほどの量の勉強をした。まず現在も、神とは何かの考えが変わりつつある。多くの人がユーチューブで、「神は私にこう言った」と語っているが、その神がすべて同じ神とは考えられないだろう。いわゆる「異教徒」の神も神だからである。それが穏やかでない敵対的な神となったとき、それは「サタン」となる。

私は自己分析をしてみて、神の私の選択は正しかったことがわかる。しかし、それがどういう神なのか私にはわからない。そもそも「祝福」の意味がわからない（旧約聖書でいう「相続」の意味の祝福ではないだろう）。しかし、これは「番頭」に近い意味かとも思う。私はこの神の番頭さんか？ とにかく私はこの神様に、何かを要請されている。私を信頼していただくのは光栄だが、私はそれに伴う名誉や地位はお断りし、特にカネなどはいりませんと言っている。「お前はカネを誤解している、神のカネは別だ」と言われるかもしれないが、何しろ私はカネの使い方を知らず、少なくとも現在のところは、カネは墮落の元であり、これにこだわる者は軽蔑されている。

特に私が何度も「有名人にはなりたくない」と言っているのは、その理由がある。私の家系の伝統はそれを嫌うからである。私や私の家族は、**人は自分の名前を、ビラやチラシのように扱うべきではない**、と考えている。本物のビラなどいうものは存在しない。私はこの点で神と衝突し、決別するかもしれないが、やむを得ない。

ところで私は前に、「自伝」を小学校の段階でやめてしまったが、老人の現在までのスパンで考えても、ただ一度しかなかった強烈な体験をした。それは遭難しかけて助かった登山家のような、具体的に話せるものではない。しかし今日まで私の一生をずっと支配してい

る。あえて言えば、それは「美のアイデア」の体験だった。私は青年時代のどこかで、就寝中に、あまりにも美しいものを見て、大声をあげて飛び起きたことがある。それは夕焼けのようなものだった、としか言えない。しかし私は「美のアイデア」あるいは「美そのもの」と言えるようなものが、実在していることを知った。画家や芸術家（特に音楽家）は、美のアイデアどこまでも求めて制作しているのだろう。彼らはたまたま名前を持っているかもしれないが、そんなものはどうでもよい。その強烈な体験を形にすることだけを考えている。

それは現実に存在するものであって、単なる感覚ではないのだから、宗教的追求と言ってもよいだろう。もしそのように考えること許されるとしたら、宗教と芸術はつながったもので、区別することができない。そしてそれを、区別できないものとして追求することによって、これまでになかった新しい世界が開けてくるだろう。我々はそういうものを求めて生きている。あるいは、そういう時代がすでに始まっているのかもしれない。これを「黄金時代」または「贅沢な」時代の到来と呼ぶこともできる。私は自分の本質を、「贅沢な人間」と規定している。